The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サ変動詞をめぐって
Author(s)	平尾, 得子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1990, 24, p. 57-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サ変動詞をめぐって

平 尾 得 子

1. はじめに

日本語の動詞表現の中でサ変動詞が重要な位置を占めることは，数の多さからいっても造語力の大きさからいっても間違いのないところである。動詞として機能するだけでなく，語幹部分が単独で名詞として機能することをも考え合わせると，動詞・名詞両面からの研究が期待されよう。にもかかわらずサ変動詞語幹，あるいは「スル」を含めたサ変動詞全般に亙る体系的な研究は未だ十分だとは言えない。

(1) まだ試みの段階だが，音楽が流れることで手術をするわれわれもリラックスできる。『朝』

(2) 「音楽をつけてみたら」と先生がアドバイスをしてくれた。『朝』

(3) あなたは分厚い書類をわたしの前に置いた。それは何かがうず高く堆積しているといった感じでわたしの前にあり『パ』

(4) これまでに何回となく停食規定を適用したのですが，そのことはかれにとって餓死を意味するのです。『パ』

サ変動詞に，語幹とスルの間にヲが挿入されるもの(1)(2)と挿入されると極めて不自然になるもの(3)(4)があることは，容易に気づかれるわけであるが，両者はどのように異なっているのだろうか。また，ヲが挿入される(1)(2)のようなタイプのサ変動詞の中には他動詞の目的語を冠した形をつくるものがあるが，

(5)　部屋／この部屋の掃除をする

(6)　コース／？このコースの選択をする[1]

(5)で指示詞「この」が表現の許容度に影響を与えていないのに対し，(6)では「この」が付加されるとなぜ不自然になるのだろうか。

本稿ではこうした現象を手がかりに，サ変動詞語幹とスルの結びつきについて考察を加えてゆきたいと思う。

サ変動詞の語幹部分は動詞的な側面を持った名詞であるとの指摘が先行の研究にあるが[2]，本稿でもこれに倣い語幹部分を独立させて動詞的な名詞として扱い，以後これを VN (Verbal Noun) と呼び[3]，「スル」と複合したサ変動詞の形を「ＶＮスル」と表すこととする。

2. ＶＮの語構成

ＶＮとは一体どのようなものを指すのか。考察を始めるにあたって，まずＶＮの範囲を限定しておきたい。

サ変動詞とは一般に単独の動詞「スル」及び「スル（ス）」を活用語尾に持つ複合動詞を指し，その語幹部分には一字漢語，二字以上の漢語，和語，外来語，混種語など多様なものが含まれている。このうち「略ス・愛スル」など一字の漢語でできたサ変動詞は，「略ナサル・愛デキル・略ノシ方[4]」が不可能なことからも窺えるように二字の漢語からなるサ変動詞とはふるまいを異にする。この辺の事情は影山氏の観察があるので詳しくは影山（1980）を参照されたい。本稿でも氏の観察に従い，これらの一字の漢語サ変動詞語幹をＶＮの対象から除外することとする[5]。また，「デューダスル・科学スル」など一過性の「名詞＋スル」の組み合わせをつくる名詞もＶＮの対象としない。

次に，比較的よく行なわれてきた語構成についての研究の成果を踏まえ，語構成の面からＶＮの形態的特徴を確認する。動詞要素が和語であるＶＮ

から見てゆくと，ほとんどが複合形態で，大きくは，1．補語要素＋述語　2．副詞要素＋述語　3．述語十述語の三つに分かれる。和語の場合，原則として，述語要素が後部に入り前部にその他の要素が位置する構成になっている。阪倉（1966）が，固有日本語の語構成において複合形となった居体言が最も多く形式用言「ス」と結びつくとした観察（例，ヒデリス・ナガナキス・シキマキス）は，現代語にも有効である。

漢語ＶＮの場合は，和語ＶＮの語構成とは語順は変わるが，複合形態をつくる構成要素は等しい。和製漢語「句作・人選・心配」等の中に和語と同じ「補語＋述語」という語順の結びつきを持つものが散見されることは，和語の持つ「補語＋述語」の造語力が語種の違いを越え影響を与えていることを窺わせ，興味深い。

外来語のＶＮは上の二種と違いほとんどが単独の要素で成り立っている。勿論複合形態のものもあるが，漢語の場合と同様，外国語本来の言語体系の中での造語法を継承しているだけにすぎない。しかし，外来語にもやはり和製と呼ばれるものがあって，これらは和語の語構成と同じ語順をとる。以上を(7)に簡単にまとめておく。

(7)

単一形態		幸い・損・アドバイス・アピール
複合形態	主体(自動詞)	息切れ・凝血・レベルアップ
	対象	粗捜し・握手・モデルチェンジ
	着点	山登り・先送り・帰国・乗車
	起点	蔵出し・親離れ・出国・落馬
補語要素＋述語	道具・手段	砂遊び・水攻め・毒殺・銃殺
	原因	旅行疲れ・病死
	場所	陰干し・海釣り・籠城・残塁
	時	昼寝・夜遊び・冬眠
	その他	客扱い・貧乏揺すり・雲集

副詞要素＋述語……早死に・長生き・完勝・力走
多投・一見・二転
述語＋述語……行き来・まとめ買い・売買・
導入

3. VNヲスル

3.1 先行研究

さきに述べたように，VNについての研究はこれまでそれほど多くなされてきたわけではなく，特に文法的なふるまいを正面に据えた研究はごく僅かに限られるように思う。

その中で，影山（1980）は，VNスルを他の一般の複合動詞と比較して，次のような重複・省略現象において，VNスルが，一般の複合動詞とではなく「名詞ヲスル」と共通したふるまいを見せることを指摘し，VNスルがVNヲスルから派生すると主張した。

(8) a　母は，内職—しいしい，私を大学に入れてくれた。：VNスル

b　山田さんは，ネクタイをしいしい急いで家を出た。：名詞ヲスル

c ＊母は，内職し—内職し，私を大学に入れてくれた。

d　うさぎは，飛びはね—飛びはね，帰っていった。：複合動詞

(9) a　アメリカ人はよく発言するが，日本人はあまり　φしない。

b　山田さんはよくネクタイをするが，私はあまり　φしない。

c ＊うさぎはよく飛びはねるが，かめはあまり　φはねない。

（9 cは「飛びはねる」の意では不適当。9 b c は筆者の補足例）

これに対し，Miyagawa（1987）は次のような例を挙げ，

(10) ＊　太郎はいつも成功するが，花子は時々しか　しない。

VNヲスルが可能になるもの（例，発言スル）と不可能なもの（例，成功スル）があるとして，前者を Do（V）N，後者を Happen（V）Nと名づけた。そして，Do（V）N はテイルを付加した時に動作の進行を表すが，Happen（V）Nは状態や完了相を表すと説明した。

アスペクト形式との関連においてＶＮを分類しようとした点に示唆されるところは多くあるが，テイルが進行の意であるか否かということは積極的にＶＮを分類する基準にはならないと考えられる。「結婚・卒業・退陣・審議入り・スタート」等はテイルによって動作の展開過程を取り出されないがＶＮヲスルの形を有している。確かにテイルが進行の意を持つＶＮにはヲが下接すると言えるのだが，動作の展開する過程を持たないＶＮの処理に不十分なところが残る。

宮川氏の指摘を受け，影山（1990）は(11)のようにＶＮを四つに分類した。他動詞は一律に対格表示を受け，自動詞は対格表示を受けるもの，受けずにスルと複合するもの，ガの表示を受けるものの三種類に分けられている。

(11)　〔＋意志〕：対格標示アリ　transitive VN …… ～ヲ申請・勉強(ヲ)スル
　　unergative VN …… 家出・食事・運動・離婚・ダンス(ヲ)スル
　　〔－意志〕：対格標示ナシ　unaccusative VN…… 暴発・誕生・成長・マッチ・ヒット—スル
　　nominative VN …… 胸焼ケ・胸騒ギ・雨漏リ・遠鳴リガスル

ここで注目したいのは，意志性の関与に触れられた点である。しかし，意志性・主体性についての言及はこれ以外になく，意志性とＶＮスルとがなぜ，どのように関わっているのか，(5)(6)のような目的語を冠した形ではどうなのかなど，考えなければならないことは多く残されているように思う。

以下，この問題について具体例を検討しつつ考察を加えることにしよう。

3.2　意志的な動作

先行の研究で示された観察をもとに，ヲ挿入がほとんど行なわれないＶＮ，自由に行なわれるＶＮを挙げてみることから始めよう。

(12)？ＶＮヲスル

a 自動詞：死亡・誕生・雲集・早死に・ヒット・類似・拮抗・付属・相当・場慣れ・フィット・前後・原因・一笑・二転・三転全焼・半減・出火・凝血・地割れ・息切れ・コストダウン

b 他動詞：魅了・左右・喪失・逆撫で・マーク・意図・意味・一見・多投・完破・全廃・既述

(13) VN(ヲ)スル

a 自動詞：注意・握手・帰国・草抜き・夜更かし・アンケート・力投密談・長生き

b 他動詞：研究・点検・貸し借り・特別扱い・キャッチ・インプット朗読・直訳・予告

両者を比較してみると，(13)に動作性のものが多いのに対し，(12)の多くを状態性のVNが占めていることが一見して明らかである。特に「類似スル・拮抗スル」はスルが終止形で用いられることのない，金田一（1950）の言う第四種の動詞で，形容詞相当の動作性の極端に希薄なものである。

(12)には，状態性のVNの他にも「誕生・死亡」など，なんらかの動きを表してはいるが主体的に行為をおこす動作主が設定されないといったVNが含まれている。このことから考えると，影山氏の言われるように意志性の有無によってヲ挿入の問題を取り扱うのが妥当かと思われる。

前節でテイルの解釈について少し触れるところがあったが，アスペクトの問題はここでとりあげている動作主体や意志性・主体性の問題と無関係に存在しているのではない。森山（1988）では，意志性を喪失することで動作の展開過程が失われるメカニズムが示され，両者の間の深い繋がりが指摘されている。動きの行なわれる過程が取り出され進行の意になるか否かという問題は，意志的な行為であるか否かというより広い範囲に含まれる性質のものであると考えられる。従って，(12)には状態性のVN及び非意志的な行為を表すVNが，(13)には意志的な動作を表すVNが含まれると捉

えることができるだろう。

2章でVNには自動詞主語と述語から構成されるものがあると述べたが，この種のVNにはヲは挿入されず，特に和語の場合は，「VNガスル」という形が用意され，自然現象の立ち現れるさま，生理現象の知覚される様子が表現される。文構造の研究の成果を利用すれば，主語と述語が組み合わされるレベルは，既に動作の範疇から事態の範疇へと進んだものと言える。つまり，主述要素を備えたVNは意味的には動作の範疇を越え，一つの事態を表していると考えられる。事態を表すVNには意志的な動作・行為の下接するヲは接続しないのである。

副詞的な要素に目を転じると，(12)のVNに動作の行なわれる数を規定する要素「一・二・多」が見られることが注目される。動きのありさまを表す様態副詞の要素が(13)に現れるのと対照的である。二種の副詞の作用するレベルの違いを考えると，やはりここでも動作の範疇に収まっていることの重要性が指摘できるのではないだろうか。両者の作用領域について仁田(1983)は，様態副詞が動作の内部にあって「動きの成立そのもののレベルに働」くのに対し，頻度の副詞は「それを包み込んだ外側のレベル・層で働く」と述べている。動作を既に成立したものとして扱い，その外側から規定・修飾する副詞要素を含むVNは，純粋に動きを表すものではないと理解される。ヲの下接されない所以である。アスペクトに関わる副詞要素「既」を持つVNや，動作の達成面に言及するような程度副詞の要素から構成されているVNがVNヲスルとなりにくいのも，同様の理由によるのではないか。

このようにVNが自らの意味特徴を反映させ，ヲ・ガを伴ってスルと連なってゆくありようは，VNと一般の名詞との平行性に気づかせてくれる。「音ガスル・気ガスル」で「ガ」によって自然発生的な現象が知覚されるさまを表すのと同様の捉え方が「VNガスル」に窺える。属性表現「美シ

イ色ヲシテイル・丸イ形ヲシテイル」がテイル形で表されるのと，VNの属性表現「類似シテイル」は平行している。但し，名詞には「名詞スル」という複合動詞の形がないので，主体性のないこの場合にもヲが入っている点でやや違いが見られる。主体的な動作を表す場合，一般の名詞もVNもヲを伴って，スル形で終止することができる。

では，なぜこのような平行性が見られるのか。これは恐らくスルが単独では実質的な意味を持たず，抽象的な動作概念のみを表す形式動詞であることに由来していると思われる。スルは文中における自らのふるまいを自分自身で決めるのでなく結合する要素の意味内容によって決められるのである。こう考えると，ヲ挿入の問題は，VNが意志動作であるか否かといった単純な問題にとどまらず，スルと結合する要素全体に及ぶ広がりを持った問題としてあらたに見直されてくる。形容詞（部屋ヲ明ルクスル／オ蔭様デ元気ニシテイマス）やオノマトペ（ウロウロスル／アッサリシテイル）との結合をも視野に入れて考える必要があるだろう。そして，これらの表現にもやはり主体性の関与が認められるということをみて初めて，これまでのVNスルを主体性と関わらせた考察が，スルと結合する要素全体

ガ	φ			
息切れする 気乗りする 地割れする	開花する 出水する 停車する ガス漏れする 底光りする 値上がりする	類似している 関係している 人間離れしている	死亡する 全焼する 誕生する 勢揃いする 早死にする	(記憶)喪失する (揺れ)感知する (記録)保持する
気・音がする (事態)		色・形をしている (状態)		

小 …… 主体性 ……

の問題として位置づけられるのである。

以上を簡単な表にまとめておく。

4. NノVNヲスル

さて，VN（ヲ）スルが他動詞である場合には，目的語をVNに冠した次のような形が可能である。

(14) a（イタリアの組織委員長は）米国大会でも運営の手助けをすることになっている。「朝」

b ソ連の係官の立ち会いのもとに，漁船の検査をする。『朝』

c 観測船「しらせ」が14日東京・晴海ふ頭を出航した。隊員のうち38人が再来年まで越冬して地質，気象などの観測をする。『朝』

d ソコツヤ博士は，ぼくなどよりも，ずっと原たつさんの治療をするにふさわしい医者ではなかったかと思うのだ。『カ』

e 副詞節は，述語の修飾をしたり，文全体を修飾したりする働きを持つ。『基』

しかし既に(5)(6)で見たように，すべての他動詞VNヲスルがこのようなふ

ヲ		
＊NノVNヲスル		NノVNヲスル
(犯人)逮捕する	参加する	(情報)提供する
(文化)理解する	卒業する	(病人)診察する
(仕事)エスケープする	離婚する	(学生)サポートする
(友)泥棒よばわりする	弱い者いじめする	(お金)貸し借りする
(仕事)選り好みする	会社勤めする	(車)手入れする
動作・テニスをする（動作）		
…… 大		

るまいを見せるわけではない。どういうものがNノVNヲスルとなり，どういうものが排除されるのか，VNヲスルという動作に含まれる要素の制約について考えてゆかねばならない。まずは(5)(6)の例に戻り，指示詞「この」の存在が両者の文法性に与える影響を考える。

(5)a′　今，部屋を掃除している　：動作進行

b′　今，この部屋を掃除している　：動作進行

(6)a′　今，隣の会議室でコースを選択している　：動作進行

b′＊今，会議室でこのコースを選択している

b″　去年このコースを選択している　：経験

テイルを付加させた時，(5)(6)の差が顕著に浮かび上がってくる。(5)では指示詞「この」は動作の展開過程に何ら影響を及ぼさない。対象が指定されても動作自身は限定されないのである。それに対し(6)では，対象を指定する「この」が動作の局面に影響を与えているのがわかる。「選択する」が持つ動作の過程と動作の達成の局面が，対象が指定を受けることによって狭められ，動作の達成の局面だけが切り取られた結果になっているのである。ここからわかることは，NノVNヲスルという表現の成立において，指示詞による対象の個別化は，取り出される動作の局面に変化がなければ有意味ではないということである。重要なのは，動作の局面に影響を及ぼしているか否かなのである。

ここで動作の局面に影響を与える要素として動作が完了した状態，すなわち結果の要素が関与していると考えられる例が思い合せられる。

(15)a　肝臓の四分の一を提供した父の会社員明弘さんは（略）順調な経過をたどっている。『朝』

a′　肝臓／？肝臓の四分の一　の提供をする。

b　宮田さんを土居が秘書に抜擢した　『連』

b′　才能ある新人／？宮田さん　の抜擢をした

c　昨夜未明，M7.1の地震を観測した　　『朝』

c′　気象／？M7.1の地震　の観測をした

(16)？事業の民営化／外部空間の内部化／制度の民主化をする

(15)cの場合，観測結果の数値によって，(15)aの場合，動作の行なわれた結果測定された量によって，それぞれ動作が達成点に収束される。(15)bでは，固有名詞を持ち出すことでひとりの具体的な人物が選び取られた結果の面だけが取り出され，指定を受ける以前に持っていた，連続性を背景とする動作の幅が失われている。動作が達成，成立した時点で明らかになる要素を動作に冠することは，動作を既に成立したものとして扱い，外側から規定することに他ならない。3.2で述べたのと同様の指摘がここでも可能なのではないか。(16)は逆に結果性を内在させるVNに対象となる名詞を被らせた例である。

こうしてみると，NノVNヲスルという表現にとって，対象に働きかけ，動作をおし進める時間の幅が保持されるか否かがこの形式の表現の成立を左右する決め手になっているのではないかと思われてくる。(17)のような動作の展開過程を表さないVNにもこれは当てはまる。そして(17)′の例は，VNが目的語を冠することで意志性を失うことをはっきりと示している。

(17)？　犯人の逮捕／権利の取得　をする

(17)′a　犯人を逮捕（し）に行く／権利を取得（し）に行く

b？犯人の逮捕に行く／権利の取得に行く

c　気象を観測（し）に行く／施設を視察（し）に行く

d　気象の観測に行く／施設の視察に行く

「VNスル」においてVNが意志的な動作であるかどうかがヲ挿入の可否に関わる要因であったことから考えれば，「NノVNヲスル」でVNが動きの行なわれる過程を持つことが要求されるのは，恐らくNノVN全体で意志的に行なわれる動作を表すのに必要であるからなのではなかろうか。

ヲスルに先行するＶＮ・ＮノＶＮ双方に，意志的な動作という意味的な共通性が見いだせるように思うのである。

さて今度は，ヲ格以外の格を持つ名詞の場合を見てみよう。ＶＮヲスルには格の上にも制限があるようである。紙幅の都合上，いくつかの用法で代表させる。

(18) a　ダイハツ工業は八日にタイで現地企業とビルを建設し

b ？八日の建設をし　（ニ格：時）

c ？タイでの建設をし　（デ格：場所）

d ？現地企業との建設をし　（ト格：共同動作の相手）

(19) a　男はいったんアメリカに入国したが，すぐに次の滞在先を指定した。

b ＊男の入国をした　（ガ格：動作主）

c ？アメリカへの入国をした　（ニ格：着点）

(20) a　いつもは七時に会社から帰宅いたします。

b ？会社からの帰宅をいたします　（カラ格：起点）

「マデ・ヘ・ヨリ」等，必須格，副次的な格を問わずヲ格以外の格が「ノ」を伴ってＶＮヲスルと接続すると極めて不自然な表現になる。「アメリカへの入国」「タイでの建設」という結合に不都合がないとすれば，問題はこうした補語の要素とＶＮヲスルとの結合にあるとみられる。

5. 一語化

３章では，ＶＮの語構成を観察し，ＶＮが格助詞を伴うのはＶＮが動作を表す場合であること，更に動作の中でも意志的な動作であることを見た。４章では，ＮノＶＮヲスルという形式を扱い，ヲ格以外の補語要素は一般にＶＮと結びつかないこと，また，動きの対象を表すヲ格名詞であっても，動きの局面が動作達成の一点に狭められた場合には，ＶＮヲスルという動

作の内部に入れないことを確認した。この制約は3章で確認した，VNヲスルという表現が意志的な動作を表すことから生じるものと考えられる。

ところで，次の(21)は一見するとこの制約に抵触しているかに思われる。

(21) a　水かぬるま湯でていねいに流します。その後は，スキンローションからのお手入れをしてください。（説明書）

が，この「から」は，

a′＊ローションから手入れをする

上の例からもわかるように，VN「手入れ」が動作を実現させるために要求したものではない。4章で扱った補語要素とは違い，「Aから始める手入れ」「Bから始める手入れ」と数ある「手入れ」の中の一つが表現されているにすぎない。「手入れ」の種類を示す，自明のひとまとまりの名詞として意識されているものなのである。

この「自明のひとまとまりの名詞としての意識」というのは，先程まで見てきたVNをめぐる考察にあらたな視点を付け加えてくれる。前章で内部制約に触れるとして挙げた容認性の低い表現が，自明の一個の名詞として扱われることでその容認性を上げると考えられるからである。(15)cの例を下のような状況に置き換えてみよう。

(22) a　わたし　？は／が　M7.1の地震の観測をした。

b　大学では国から研究費をもらい，プロジェクトチームを組んで，M7.1の地震の観測をしている。

ハ・ガの既知・未知をめぐる議論はよく知られるところであるが，この議論に関わって言えば，(15)aの主語をハで取り上げると不自然になるのに対し，ガに置き換えて述語部分を既に知られた行為に変えると自然な表現に転じるのは，既知情報化することで，NノVNという名詞句が一つの名詞にまとまったことによる。(22)bは「M7.1の地震の観測」をひとつのプロジェクトとして扱っているのだが，この時「M7.1」が観測した結果初め

て得られる数値という意味を失って，地震の種類分けをする一つのラベルとなっていることが目をひく。つまり，「観測をする」前から既に「M7.1の地震」，そしてその観測作業というものが存在していると見做されているのである。ひとまとまりの名詞と化したこれら(22)のVNは(15)とは違って，自由にヲを伴ってスルと結びついてゆく。そして，次のように

(23) a　この区域内でのビルの建設は，一切してはならない。

　　b　その国への入国だけは，したくない。

　　c　犯人の逮捕は，なんとか今月中にしたいと思っている。

名詞句の部分をハで取り立てた場合も，そのしくみは同様である。

ひとまとまりの名詞として捉えられた名詞句，一語化した名詞句は，そこに含まれる補語の数や結果の要素の有無に関係なく，一般の名詞と同様意志的になされる行為を表し，動詞「スル」の対象となるのである。

VNは動詞的であるという理由から，一般の名詞と大きく二つの点で異なっていた。第一に格を表出させる点。第二に動詞「スル」と直接結びついて複合動詞をつくる点である。

しかし意志的な動作を表す一部のVNは，「名詞ヲスル（スポーツヲスル)」と同様の形「VNヲスル（練習ヲスル)」を成すことができ，更に，「VNヲスル」には，動作の対象を修飾語としてVNに冠した「NノVNヲスル（ピアノノ練習ヲスル)」という表現も可能である。この形式も意志的な動作を表している。そのため，VNの動作が達成の点に狭められず，対象に働きかける時間の幅を有していることが必要とされる。また，動作の対象以外の要素も「VNヲスル」の内部には入ることができなかった。この形式には種々の制限が存在している。

5章では，この「NノVNヲスル」という動作表現を既知情報と認めることで，「NノVN」という名詞句が，ひとまとまりの名詞として扱われるようになることを述べた。一語化されることで「NノVN」は，語VN

に近づき，ＶＮが補語要素と述語から構成されていたのと同じように，補語の要素を自由に含み持つようになる。更に，名詞として扱われるということは，「ＮノＶＮ」に複数の補語要素をとり，動作を外部から規定するような要素と結びつくことを許す。名詞一語相当となった「ＮノＶＮ」は，上記の制限から開放され，一般の名詞と同様，動詞「スル」に接続してゆくのである[6]。

6. おわりに

以上，サ変動詞「ＶＮスル」を取り上げ，そこに格助詞ヲ挿入される現象を中心に考察した。「ヲスル」に連なる語「ＶＮ」と名詞句「ＮノＶＮ」とを対比し，意志的な動作という意味的な共通性を認め，それぞれの動作を構成する要素を見た。語としての資格を有する「ＶＮ」に比して名詞句「ＮノＶＮ」には，構成要素に対する大きな制限が存在していた。が，「ＮノＶＮ」が一語化し，ひとまとまりの名詞となることでこの制限は消え，ＶＮに見られた構成要素は自由に「ＮノＶＮ」に現れるようになる。

本稿では，なぜ「ＮノＶＮヲスル」に格の制限があるのかという問題については答えることができなかった。影山（1990）では，「ＮノＶＮヲスル」をシンタクスでつくられる「語」として扱い，語形成規則の一般的制約から説明を試みているが，今この分析について検討する用意がない。後考を期したい。

注

1) 文頭に付した＊は，その文が非文法的であること，？印は文法性について疑いがあり，人によって判定がゆれるものであることを示す。

2) 山田孝雄（1940）は，漢語を分類する際，「これは，（ＶＮのこと：筆者注）その外来語の本義が動詞なるものの転来せるものにして，その本体は国語にては一種の名詞として取り扱われるべき性質のものなり」（16頁）と述べている。また，動詞的な側面として，準体言「神戸より乗船の際

に」や目的体言「散歩に出かく」，命令「あの波をご覧な」などの用法があることを指摘している。

3) この命名は，影山 (1982) が，Samuel E. Martin (1975), 'A Reference Grammar of Japanese' Yale Univ. Press に倣って名づけたものを踏襲したものである。

4) ＶＮスル：帰国ナサル／入国デキル／出国ノシ方・類似ノシ方（様）
一字漢語動詞スル：＊略ナサル／＊愛デキル／＊逸シノ方
名詞スル：科学ナサル／科学デキル／？科学ノシ方

5) 「損なさる・得をする」などは対象とする。

6) 本文では扱なかったが，「ＶＮ(ヲ)スル」のＶＮも，ひとまとまりの名詞として扱われることがあるようである。顕著な例は「ＶＮヲヤル」と書き替えられるときのＶＮである。また，名詞一語扱いになるということは，４章で述べたような名詞の形をとり得るということである。従って，次のような非意志的な用法にもヲが現れる。

格子は視覚的に半鏡面のような作用をする『街』

米エネルギー省は，同工場周辺住民の中には，ソ連チェルノブイリ事故以上の被ばくをした人も多いことを示す報告書を発表した。『朝』

用例

『朝』：朝日新聞
『パ』：倉橋由美子『パルタイ』新潮文庫
『カ』：なだいなだ『カルテの余白』集英社文庫
『街』：芦原義信『街並みの美学』岩波書店　同時代ライブラリー19
『連』：言語研究編(1983)『日本語文法・連語論（資料編)』むぎ書房
『基』：益岡隆志・田窪行則共著（1989)『基礎日本語文法』くろしお出版

参考文献

影山太郎（1980)『日英比較　語彙の構造』松柏社
(1990) "Light Verb Construction and Syntax-Morphology Interface" Nakajima, Heizo (ed.) Current English Linguistics in Japan, Mouton de Gruyter
金田一春彦（1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』17
斎賀秀夫（1957)「語構成の特質」岩淵悦太郎・他監修『講座現代国語学Ⅱ　ことばの体系』筑摩書房

阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店
Shibatani and Kageyama (1988) "Word Formation in a Modular Theory of Grammar: Postsyntactic Compounds in Japanese." Language 64:3
田野村忠温（1988）「「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」」『日本語学』7:11
長嶋善郎（1980）「語構成の比較」國廣哲彌編『日英比較講座第1巻　音声と形態』大修館書店
竝木崇康（1985）『新英文法選書2　語形成』大修館書店
仁田義雄（1983）「結果の副詞とその周辺」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
Miyagawa Shigeru (1987) " Lexical Categories in Japanese." Lingua 73
村木新次郎（1980）「日本語の機能動詞表現をめぐって」国立国語研究所報告65
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
山田孝雄（1940）『國語の中に於ける漢語の研究』宝文館
J. Grimshaw and A. Mester (1988) "Light Verbs and θ-Marking" Linguistic Inquiry 19:2

（大学院後期課程学生）